パラグアイの日本人移住

パラグアイの日本人移住は、1936 年ラ・コルメナ移住地への入植から始まりました。第二次世界大戦による一時中断の後、戦後は 1954 年に再開され、1959 年には移住協定が結ばれました。

戦前・戦後を通じ、移住者の大多数は自営開拓農業を目的とした家族単位の移住者です。戦後は、パラグアイ国によって開設された移住地のほか、JICA の前身である日本海外移住振興株式会社および海外移住事業団が開設した移住地へ多く入植しました。

これらの移住地の多くは未開発の地域であったため、移住者の活動は農業を基盤とした村づくり・地域開発の推進力となりました。

現在の日本人移住地は、JICA 開発移住地でも日系人口の比率は約 1 ～ 2 割で、パラグアイ人と日本人移住者とがともに暮らす社会となっています。

Paraguay

ラ・コルメナ移住地
パラグアイ移住のはじまり

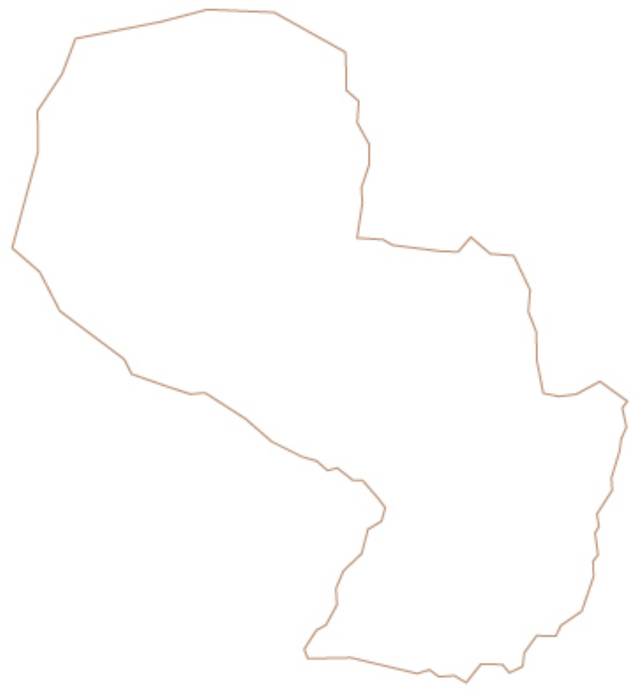
1934 年にブラジルで「二分制限法」* が定められると、当時年間 2 万人を超えていたブラジルへの移住者が大幅に制限されることになりました。そこで、ブラジル拓殖組合 ** の専務理事であった宮坂国人（みやさかくにと）氏は、新たな移住先を求めてパラグアイで調査を行いました。そして 1936 年にはパラグアイ政府から日本人 100 家族の移住許可を取得し、ラ・コルメナ移住地が開設されました。

ラ・コルメナ移住地はパラグアイにおいて戦前からある唯一の日本人移住地であり、戦後に開設された移住地のさきがけともなりました。現在は、ぶどうやマンゴーなどの果樹栽培がさかんに行われています。

* 一国から 1 年間に受け入れる移住者の数を、過去 50 年間までの移住者総数の 2%とするという法律。
**1929 年設立。1927 年に発足した海外移住組合連合会のブラジルでの現地事業実施機関として、移住地の開設・受入支援などを行った。

Paraguay

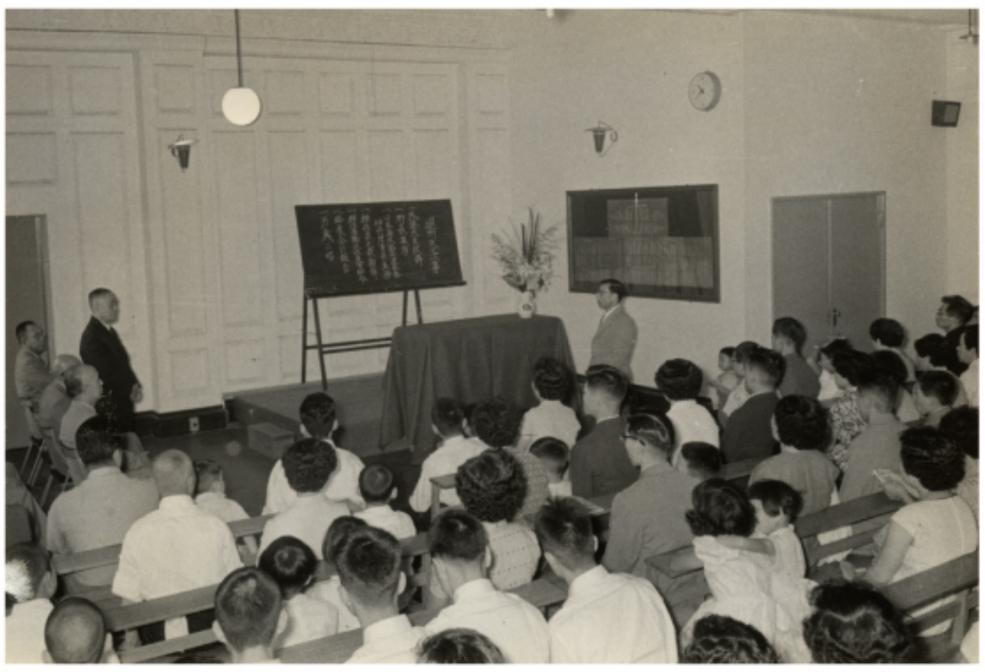
戦後移住
移住者の道のり



移住者は、乗船の 1 週間から 10 日前に海外移住センター（横浜または神戸）に入所し、渡航準備にとりかかりました。

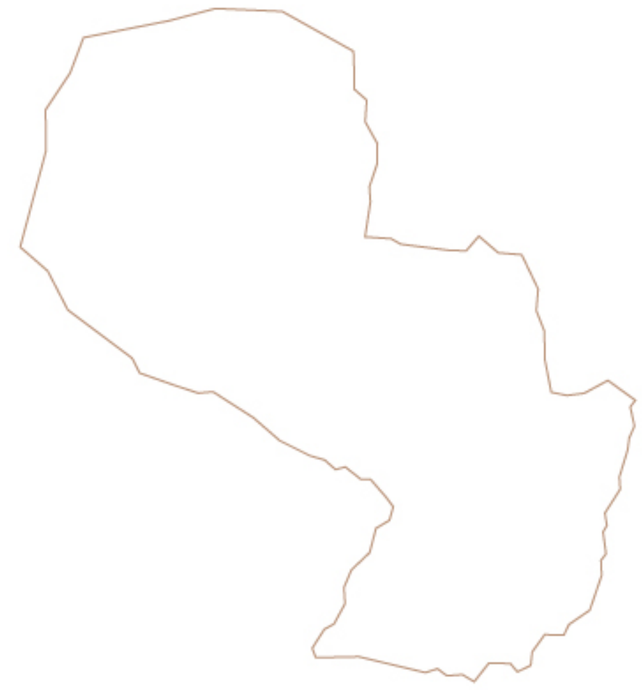
センターでは、移住者の健康診断、パスポートの申請や資金の両替など渡航に関する手続きが行われたほか、各種の講習も行われました。講習には、語学、国際教養、移住地事情、移住者の心構え、といったものだけでなく、果樹、蔬菜、畜産、病虫害防除、農機具操作など農業の専門知識に関するものもありました。

そうして出航の日を迎えた移住者は、専用バスで波止場へと向かい、移住先へ向かう船に乗り込みました。



Paraguay

戦後移住
移住地の造成



移住地の開設は、測量を行い地勢を把握した上で、地形図や道路・橋の建設計画、区画（ロッテ）割りを作ることからはじまりました。その上で道路造成などを行い、移住者のための一時宿泊施設を建設しました。

こうして受入準備の進む移住地へ入植した移住者は、原生林を伐採して山焼きを行い、焼き畑を作りました。また、移住者同士で助け合って住居を建て、生活の基盤を固めていきました。移住者の家が整ってくると、移住地の中心地には、学校や診療所、公民館といった共同利用施設も建設されていきました。

Paraguay

日本語教育

　移住地では入植初期から、子弟への日本語と日本文化の継承を目的として、日本語学校が開設されました。現在も、各地の日系団体によって運営される 10 校の日本語学校と、その他の日本語教育機関とあわせて 1,000 名近い生徒が学んでいます。

　近年は日系子弟以外の生徒の増加に伴い、外国語としての日本語を学ぶクラスを設置する学校も登場しました。現在、パラグアイの日本語教育は、日系子弟だけでなく、パラグアイ人子弟も含めたものへと変化しています。

Paraguay

日系人社会と日本文化

移住者はお盆や祭りなど移住地におけるイベントに太鼓を使いました。しかし、それは母県から寄贈された太鼓か、現地で作られた素朴なものでした。のちにイグアス移住地の工房で、本格的な和太鼓が製作されるようになりました。

太鼓以外にも、パラグアイの日系人社会では盆踊りや日本舞踊、食文化でもいなりずしや巻き寿司、赤飯などが、人々が集まる場などでふるまわれています。

Paraguay

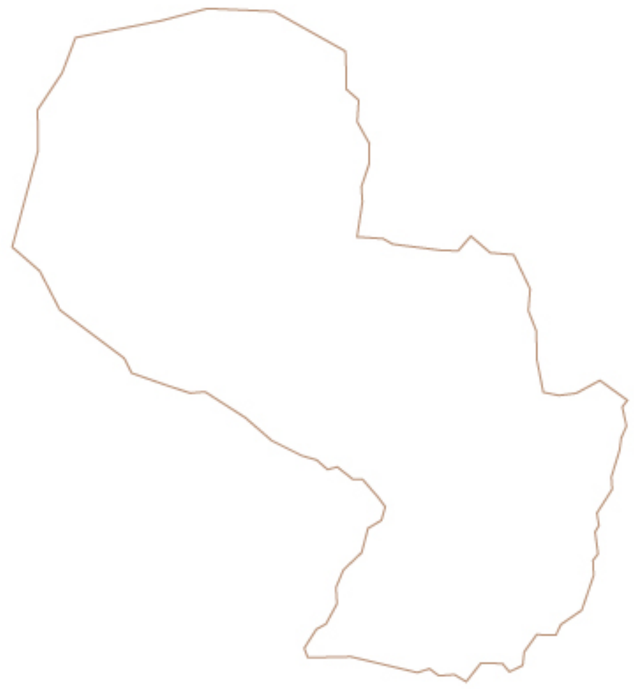
パラグアイの大豆を支える日系農家

　戦後に自営開拓農として入植した移住者たちは、当初、地域の特産だったマテ茶や油桐、ポメロなどの永年作物を栽培しました。しかしその価格が暴落したり、果樹の病気による伐採命令が下ったりと、その営農は不安定なものでした。そして、綿花、養蚕、牧畜、野菜栽培などを経て、1980 年代からは大豆と小麦の大規模機械化農業が中心となりました。

　大豆は、1960 年にラパス移住地の日系農家によって初めての対日輸出が行われたことから、輸出用作物として注目され、全国的に栽培されるようになりました。

Paraguay

不耕起栽培の導入



　現在多くの日系農家では、不耕起栽培法による大豆と小麦の栽培に、マカダミア・ナッツなどの永年作物や牧畜などを組み合わせた永続的な農法をとりいれています。不耕起栽培とは、植え付け前の耕起と整地を行わず、全作物の残渣（残りかす）で地表を覆ったままの状態で種を蒔く農法です。

　それまでの方法では豪雨などによる土壌の流亡（エロージョン）が大きな問題となっていました。そこで、土壌の保全をはかるため、1983 年にイグアス移住地の日系農家でこの不耕起栽培が導入されました。

Paraguay

パラグアイの農業発展と日系人の貢献

不耕起栽培は、より適切な時期に種を撒くことが可能となる上に、農機具への設備投資が節減できることもあり、全パラグアイの日系農家へと広がって行きました。現在、この農法は全パラグアイへと普及し、2009 年時点では、パラグアイの主要穀物生産地帯での不耕起栽培実施率は 95% 以上になり、大豆・小麦の大規模栽培を支える技術となっています。

農業技術を支えてきた農業総合試験場は、2010 年 4 月に JICA から日系農協中央会へ移管され、これからもパラグアイの農業発展に貢献することが期待されています。

Paraguay

パラグアイの日本人移住地および集住地

図	地名	日系人口* (人)	入植年	面積** (ha)
1	ラ・コルメナ移住地	310	1936	
2	チャベス移住地	189	1953	
3	アマンバイ移住地	465	1956	
4	ラパス（旧フラム）移住地	667	1955	15,952
5	ピラポ（旧アルト・パラナ）移住地	1,279	1960	84,217
6	イグアス移住地	832	1961	87,762
7	ピラレタ移住地	15	1984	533
8	アスンシオン市および近郊	2,126	–	
9	エンカルナシオン市および近郊	342	–	
10	エステ市および近郊	138	–	
	その他	116	–	

*パラグアイ日本国大使館が日本人会等を通じて実施する「長期滞在者永住者実態調査表」、および各日本人会の「在留届」等による（2004 年）

**JICA 設立の移住地

総人口 ------ 600万人
日系人口 ---- 7,000人

Paraguay